

4

中島家蔵書資料について

清水 信子

北里大学東洋医学総合研究所

瀬戸内市邑久町の中島家は、十代続く医家であり、文書、器物、そして医書をはじめとする蔵書等代々の多くの貴重な資料が残されている。それらについては、これまで「科学に関する文献資料と実物資料を総合的に扱えるコミュニケーションの研究」(文科省科研費助成・特別領域研究(2):課題番号14023218)の一環として全体が調査され、また個々の資料の研究も進められ、成果が発表されてきた。蔵書資料全体については目録化されたものの、未整理な点が残されている。そこで、今回改めてそれらを調査し、詳細な書誌事項を整理し、全貌を明らかにするとともに、各資料について、中島家における旧蔵者、所蔵経緯、来歴等を解明していこうと試みる。それにより、中島家代々の学術の受容と医業との関係、またその傾向、変遷が窺測されよう。本発表では、まずその端緒として、蔵書資料の概要を報告する。

中島家の系譜については、四代友玄(文化五年・1808~明治九年・1876)が嘉永二年(1849)にまとめた『中島姓一統家系』(以下略『家系』)に詳しく、それによれば、現中島家は、本家二代当主友三の長子玄古が分家することより始まる(宝暦十年・1760頃か)。以下宗仙、友玄、玄章、哲、一太、達二、そして、現在、当家の資料を管理するとともに、研究されている洋一氏が九代、継いで祐一氏と、友三から数えて十代に亘る医家として続いている。

蔵書資料の概要については、詳細は現在調査中であるが、点数は約500点弱。その約八割は刊本で、残る写本は、主に医書である。分野により大別すると、まず医書は全体の約三分の一にあたり、そのうち刊本には、漢籍関係では『本草綱目』『傷寒論』等、及びそれらの邦人注釈書、邦人著作では『寿世保元』『本朝食鑑』『遠西医方名物考』等、そして『解体新書』『医範提綱』等翻訳関係がある。写本には、『傷寒論抜書』『十四経絡発揮和解』『痘疹治術伝』等既存の著書の移写や抄録、『吉雄先生聞書』『(華岡青洲)外療聞書』、『周陽池田瑞仙痘科口授記聞』池田瑞仙痘科関連といった講義聞書、稿本が見える。医書以外の分野では、漢籍関係とその邦人注釈書、その他邦人著作が約半々で、漢籍関係は主に刊本で、四書五経等経書が最も多く、次いで詩文集類、諸子類、『円機活法』等辞書類、歴史書とあり、邦人著作は、漢詩関係が最も多く、次いで『辨名』『辨道』『訳文筌蹄』等漢学関係、『日本外史』等歴史地理関係、そして和歌集等の日本文学関係、その他書画集等となる。これらの蔵書状況は、概略、漢籍関係、及び漢学関係については、比較的古くより日本において漢学の素養を身につけるべく必須の文献、換言すれば近世以前の知識人として平均的な蔵書が列なる。一方、医書については、刊本より写本が多く、またそれらには前掲したように講義聞書、稿本等も散見し、そこからは所蔵者が実際に勉強しようとする意欲的な態度が窺測され、先の漢学の蔵書状況とは傾向が異なる印象を受ける。

以上の蔵書状況は全体を概観したものであり、各代における学術、医業の傾向を辿る上では、個別に旧蔵者を特定が必要であるが、資料に記された署名、或いは、書簡、日記等各人の記録により判明する場合もある。とりわけ四代友玄は、『家系』をものしたように記録に長け、天保四年(1833)、京都に遊学した際には、日記『京遊備忘』、出納帳『京遊厨費録』等を記す他、父宗仙(安永三年・1774~天保十一年・1841)からの書簡も残し、京遊二書には、吉益北洲、緒方順節等師事した人物や購入した書物が記され、蔵書の経緯を知る上で有益な資料となる。それらを勘案すると、本蔵書は宗仙、友玄父子時代のものが多見し、この二氏がその中心的役割を担うと思われる。今後はさらに調査を進め、蔵書状況から見る中島家の学術・医業の受容・変遷、延いては地方知識人の学問の諸相を考察していきたい。

(本発表は、文科省科研費助成・基盤研究(C)「江戸時代における地域医療研究~岡山県邑久郡の中島家をもとに~」(研究代表者:松村紀明,課題番号23501206)による研究成果の一部である。)